

# 土佐日記地理考

—室津・津呂・室戸—

竹 村 義 一

土佐日記の「むろつの泊り」について、私は「甲南国文21号」において、津呂つら（室戸市室戸岬町）という説を排し、室津（室戸市室戸町）だという説を探り、また一月十七日以後の泊りも、白浜（室戸市室戸岬町）でも津呂でもなく、室津であることを主張した。そして、右の文中の「岬室津と津呂」の中で、室津と津呂の港としての性質を比較したが、紙数の都合で大筋について述べたにとどまったので、ここに改めてくわしく考えて見たい。前稿と若干重複する部分があることを諒承されたい。

## 一 室津・津呂兩港の改鑿と雅澄の誤解

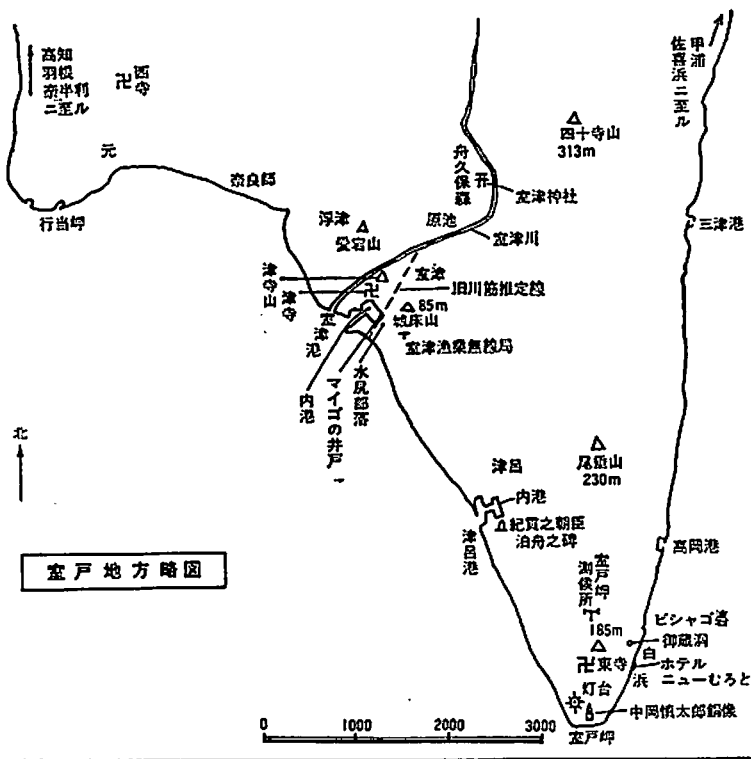
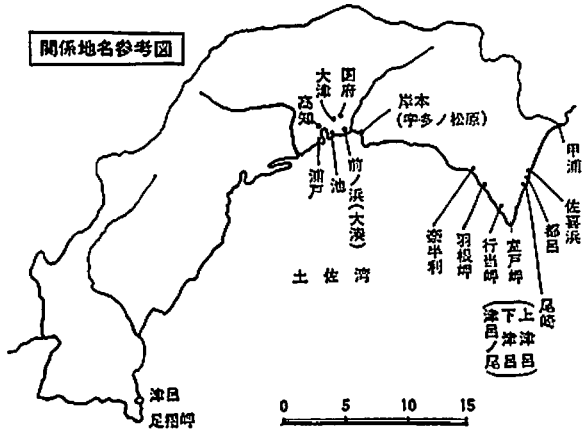
まず土佐日記の「室津」むろつ（以下特別の場合を除き地名には漢字をあてる）について、近世の註釈書がどのように扱っているかを概観

してみるとすることとする。季吟の「抄」は「土佐国安芸郡也」と記し、由豆流の「考証」は、それにさらに「和名抄」の「安芸郡室津室津郡」を引用し、御杖の「燈」、守部の「舟の直路」は「和名抄」を引いている。大秀の「解」、景樹の「創見」は何も記していない。これらの註は、いずれも、土佐国安芸郡内にある、ということ述べているだけである。「燈」には、ほかのことについて言及しているが、それについては、ここでは触れない。

右の諸書の成立の年代は、季吟の「抄」は一六六一年で早い、その他は「考証」が一八一五年、「燈」一八一七年、「創見」一八二三年、「解」一八二九年と、四書が相次いでおり、「舟の直路」がやや遅れて一八四二年である。

このあと十五年をおいて一八五七年に地元土佐の鹿持雅澄の「土佐日記地理弁」が成り、室津の泊りの位置について、問題を提起す

関係地名参考図



室戸地方略図

ることとなる。

雅澄は、まず前述の「和名抄」の郷名「室津」、「延喜式神名帳」の土佐国安芸郡の部に「室津神社」の見えることを引用してから古代にこの地方に「室津」という地名のあったことを確かめて、次のように述べる。(一)(二)は便宜上原文を三段に分けて、番号を付けた。

(一) コノ室津ト云ヘルハ、今ノ室津浦ヨリ、津呂浦カケテノ間ニ、港タツ処アリテ、船ノ出入セシナルベシ、当昔紀氏ノ船泊メラレシト云旧跡ノ処、サダカニシラレジトイヘドモ、蓋シ今ノ津呂浦ノアタリナランカ、

右の室津浦・津呂浦は、現在の室津・津呂と同じ場所を指すと考えてよい。現在の室津から津呂まで陸路約三<sup>サ</sup>、津呂から室戸岬の南端まで同じく約二・五<sup>ニ</sup>ある。その室津と津呂の間三<sup>サ</sup>の間に港らしい所があって船が出入りしたのであろう。紀氏の舟泊の地は、はっきりしないが、今の津呂浦あたりであらう。——と雅澄は言う。初めは、兩者の間、三<sup>サ</sup>ぐらゐの範囲と、言っておきながら、あとではその南端の津呂の辺であらうと推測している。その理由付けとして、前の文に続けて、次のように述べる。

(二) 今ノ津呂浦ノ港ハ、寛文元年辛丑、国君ノ命ヲ応テ、当国執政野中氏、大クイタツキ、湊口トスベキ処ニアリシ、三大巖ヲ穿チ

除キテ、遂ニ南海往来ノ船ドモノ、ヤスラカニ泊ルベキ灣港トハナシタルナリ、クハシキコトハ野中氏土佐室戸港記アリ、コレヲ室戸ノ港又室津ノ港トモイヘリシヲ、今ノ室津浦ノ港ヲ、サシツ<sup>ツ</sup>キテ掘セラレシヨリ以来、モトノ室津ノ港ヲバ津呂ノ港ト、ワカチ呼<sup>フ</sup>コトニハナレルナリ、

ここで右の津呂・室津兩港の修築が成るまでの、この地域の歴史をみてみよう。山内氏が関ヶ原の役の後土佐に入り、上方との海路交通が頻繁になり、貫之当時と同様に、いつも室戸岬の風浪に悩まされるので、避難港の必要を痛感した。室津・津呂兩港の開鑿は、同じ年代に平行して行われている。室戸岬の山上にある東寺(最御崎寺)を再建した僧、最蔵坊(最勝上人・最勝坊ともいう)が岬付近で難破する人々を救済しようとの悲願から、津呂港開さくの工事を始め、元和四年(一六一八)には港としての一応の形態を整える。二代藩主山内忠義は、これを保護援助し、さらに室津港の改修を最蔵坊に命じ、寛永七年(一六三〇)に始め、翌八年一応その工を終える。しかし兩港ともまだ避難港としての役割を十分果たすことのできるまでには至らなかった。

津呂港は、慶安年間の工事も成功せず、遂に寛文元年(一六六一)年)野中兼山は普請奉行一木権兵衛とともに、三十六万人役の人力と黄金千百九十両を投入して三ヶ月で竣工を見る。それだけでは

難船を收容するには十分でないので室津港を修築することになるが、兼山は失脚しついで急死し、一木権兵衛によって延宝五年（一六七七）に着手、同七年（一六七九）に完成した。この二港相まつて叩まわりの海難を防ぐ要港として、その功績は大であったが、落をあげての難事業で、それに払った代償も甚大であった。延宝年間の室津港の費用は人夫百七十余万人役、黄金十万余兩と「室戸港忠誠伝」は言う。権兵衛は、この兩港の入口の岩礁を取り除く難工事を、自ら人柱となつて成就しようと、かねて海神に祈願していたので、室津港の最後の難工事を終えるや、同年六月十七日未明、港上に場を構え、鎧冑ならびに太刀を海中に投じて海神に捧げた後、自刃して果てた。最蔵坊が、最初に津呂を開さくした元和四年（一六一八）から、実に五十九年を経ているのである。

敢えて、私は長々とわき道に入ってしまったが、しかしこれだけの犠牲を払わねばならない難事業であったということは、いかに室戸の崎の風波が荒いか、浦戸から阿波との国境の甲浦までが、出入りの少ない單調な海岸線で、段丘式海岸山脈と岩礁の多い荒々しい灘が多いかを語るものであることを言いたかったからである。貫之が十日間も、訪れる人もない南浜の孤村に滞在しなければならなかったこと、一度は船出しながら天候の悪化にあつて、御崎を眼前にしながらそのはなを回ることができず、もとの泊りに引き返さなけ

ればならなかったのも、むべなるかなということをお訴ええなかったからである。古来土佐は「天さかるひな」であり遠流の地であり、懐風藻の流罪の詩人石上乙麻呂の言う「南荒」であり、「南裔」であった。明治以後西洋式の汽船になり、昭和初めには千トン級の船になつても高知・神戸間に一日一回の便しかなく、十二時間を要し、海が荒れると何日も欠航して本土との交通は杜絶する。「おはな」（室戸崎）では船酔いにやられる。私などは、その辛さを、いやというほど嘗めてきたのである。昭和十年の土讃線全通まで、こうした海路の悩みが、土佐人の宿命であった。

さて本論に返つて、右の雅澄の文を見るに、今の津呂港は、もと室戸の港もしくは室津の港とも言ったのを、今の室津の港を續いて掲つてから、もとの室津の港を津呂の港と、分けて言うことになつた」と言っている。(一)で言っている事もどうも分かりにくい。(二)と合せて判断してみると、室津から津呂まで一帯の地を、昔（貫之の時代）は、室津と言つていた。その中の南端の今の津呂辺が貫之の舟泊の地であつたであろう。そして、兼山の時代に、そこに港が一つ出来た。だからこゝは、もと室津（室戸）の港と言つていた所だ。しかし続いて北端の地に、新しい港が出来たので、二つの港が出来た。故に二つを区別して、南端のを津呂港と言ひ、北端のを室津港と言うことにした。——と、こうなるのではなからうか。

きわめて、齒切れの悪い、非論理的な論法と言わねばなるまい。この論法を突き詰めていくと、南端のものと室津（室戸）を津呂と改め、北端に新たに室津という港が出来た、貫之の泊ったのは、もと  
の室津（室戸）で、今の津呂であるということになる。しかし、室津港の改修のなる延宝七年（一六七九）以前から、南の津呂と言  
い、北のを室津と言っていたことは、近世初頭の両港改修の歴史を述べた文書に、明々白々に現れて、疑う余地のない記録として残っている。第一、モトノ室津ノ港ヲバ津呂ノ港」と呼ぶことになるなどということが、現実により得るだろうか。

ところで雅澄はなぜ、室戸ノ港又室津ノ港トモイヘリシヲ……津呂ノ港」と呼ぶことになったと考えたであろうか。右の(㊦)の文中の、クハシキコトハ、野中氏土佐室戸港記アリ、コレヲ室戸ノ港又室津ノ港トモイヘリシヲ……という文中の、室戸港記と室戸の港との因果関係について、雅澄は何とも言っていないが、その文脈から言っても、心理的なつながりが推測される。兼山がこの港（前から津呂という名を持つ）を室戸港と言っているので、この港は室戸港と言ひ、即室津港と言っていたものであると速断したものである。そして、それは即土佐日記の室津の泊りであると考えたのである。ここから問題は、兼山がなぜ津呂港を室戸港と言ったのかという点に移る。これは、この小考で私が扱おうとしている主題の一

つでもある重要な問題であるので、あとで別に項目を立てて論ずることとする。

さて雅澄の地理弁は、さらに続けて次のように言つ。

(㊦) カクテ室戸ト云ルモ、ナホ同所ノ一名ニテハアレド、元トハ最御崎寺ノ山内ノアタリヲ、イヒシナラントゾ思ハル、……

と、室戸」という呼称について述べ、続いて空海についての「三教指帰」の叙述に触れているが、これも後に扱うこととする。

## 二 室津と津呂の歴史

室津という地名については、この小考の最初に記したように、「和名抄（成立九三五）」に土佐国安芸郡の郷名として、室津津呂と載り「延喜式神名帳（九二七）」の安芸郡の部に「室津神社」として神社名として出ている。現在室戸市の旧室津村分の船久保の森に「室津神社（式内社……無格社）」があり、近世初期の土佐の国学者谷兼山の「土佐国式社考」及び「南路志」「高知県神社誌」等に徴して和名抄の室津神社であることはまちがいない、と考えられる。ただし位置については変遷があったかは不詳である。

そして土佐日記（九三五）に、むろつ、が出ていて、この三つの室津（むろつ）は同一地の名称であることは疑いの余地がない。そ

して、その室津が、中世の文書、天正の長宗我部地検帳、近世の文書等に、その名をとどめながら、兼山時代の改修の前も後も通じて、室津として存在し、現代の室戸市室津（旧室津村）として今日に及んでいることは、まちがいないと言つてよい。そして、その海岸地帯を室津浦と言ひ、そこにある船着場を室津港というのも、至極当然妥當なことであらう。

室津の港については、「今昔物語卷二七の第六・地藏菩薩值火難自出堂語（岩波・大系本による）」には、「今ハ昔土佐ノ國ニ室戸津ト云フ所有リ」とあり、この話の今昔の記事からも津寺山周辺に港のあったことは窺われる。年代は十一世紀の半ばごろと推定される。下つて近世に入り、泰山の孫、谷真潮が安永七年（一七七八）浦奉行となり、東部海岸を巡視した紀行文「磯回の濼厩」（高知県立図書館蔵）に次のような寛永七・八年に最蔵坊が最初の改修をする以前の姿が描かれている。

……室津の湊ハ延宝五年にはしまり七年になれり元親主の時の地の  
検帳池の廻り宅町九段廿四代と有小舟入池有しと云……

現存の「長宗我部地検帳」（高知県立図書館蔵による）にも、池のマワリ一反廿代、池ノフチ十代 などホノギ（田島の小区画のこと、小字程度）の名に「池」が付いている。小舟のはいる池があつて海に続いてたと思へられる。そして、周囲の田の面積から、か

なりの大きさの池と推定される。この検地は天正十五年（一五八七）に行われている。

また一木権兵衛が延宝七年（一六七九）室津港修築を完成するより以前の、寛永の室津古港の図が、室津港の港番を久しく勤めた久保野家が発見されたことを、久保田博氏が昭和四一年七月の「土佐史談一四号」で報告している。それによれば、その港の規模の大きいのに驚かれるという。そして、それは寛永七、八年の最蔵坊の工事によって一応出来上がったと考えられるので、最蔵坊の主筆した工事が大きかったことが推測されると久保田氏は述べている。

その通りであろうが、最蔵坊の工事は、津呂にせよ、室津にせよ、後の兼山や一木による藩直営の大事業ほどの費用は投じていないと考えられる。従つて、この久保野家に伝わる、寛永の室津古港の図の物語の意味は、最蔵坊が寛永七年に初めて手をつける以前から、かなりの大きさで多分に、港としての地形を備えていたということになるのではなからうか。土佐日記や今昔物語の記事と思ひ合わせ、室津泊地が港津としての要素を自然的にも社会的にも、多分に備えていたことを示しているのではなからうか。

その点、津呂が近世初頭まで全く姿を現わして来ないことと対照的であると言わねばなるまい。長宗我部地検帳にも後世の津呂村分は東寺地検帳の中に含まれているのに、津呂村というのは出て来な

い。安芸郡では、室津は室津地検帳として、甲浦・野根村・佐喜浜・東寺の次に載せられ、そのあとに津寺・西寺・吉良川・羽祢はねがでてくる。この点一層、津呂と室津との社会的比重がちがうことが示されてくる。津呂という地名は、戦国時代より遡ることはできず、かつ地検帳その他の文献に戦国時代以降に現れてくる。津呂、という地名があるけれども、それは兼山が開き、今日に及んでいゝ現在の津呂(室戸岬町)の位置とは違ふと考へられている(前記久保田氏論文)。管見に入つたところでは、慶長五年(一六〇〇)多田五郎右衛門に与えた山内修理の津呂の庄屋を命じた口上書の中の「津呂」及び宛名の「津呂五郎右衛門」とあるのが、最も古い(日本常民生活資料叢書23・土佐捕鯨史による)。「津呂」という地名については、その他にもいろいろ問題になる点があるので、あとで改めて取り扱うこととする。

右に述べたように、雅澄の地理弁の、土佐日記の室津は後の——そして現在の津呂であるというのは誤りであつて、貫之當時から今日に及んでゐる現在の室津であることは間違いないと言える。この雅澄の誤りが、地理弁が刊行され流布するに及んで、土佐の国以外の学者たちは、これを信じて漸次「津呂説」を採用するようになっていったのは、やむを得ない仕儀であつた。

### 三 寺石正路の津呂説とそれに対する反論

ところが、地元土佐においても、近代における土佐史学の大成者である寺石正路氏(一八六八—一九四九)によつて津呂説が唱へられたことは、同郷の後輩である私には、いささか個人的地縁の感懐ながら、あの寺石先生が、と雅澄先生に對すると同じ意外の感を抱かすにはいられない。寺石氏は「土佐史談二〇号」(昭和二年九月)の「史蹟名勝・室戸岬」という文で、「土佐日記の室津の湊は、今の津呂港である。ことを主張し、これに對してはげしい反駁論が湧き起る。ところが、氏はそれよりずっと前から津呂説をとつていたやうで、大正二年(一九一三)発行の「土佐名勝誌」という著書で、津呂の項ですでに「津呂港(室戸港)……昔室津と稱す」と述べ、次に兼山が開き、落成後、漢文の「室戸港記」を作つたことを述べ、明治三十六年土砂中から発見された享和元年四月記とある碑(八十六字ほどの漢文を刻す)に、「……修治室戸港口……」とあるのを取上げ、次のように述べる。享和元年は一八〇一年、明治三十六年は一九〇三年である。

……さては二百年前の享和の頃迄は當港猶室戸の名を存せしなり。これを今名にて津呂港と呼ぶはいたく後の世の事なるべし。紀貫

之野中兼山の關係ある室戸港は実に此港の事にして今日の室戸村に在る室津港に非ず古今により地名の変遷あること諸國に例多し注意すべき事にこそ……。

右の文をみると、碑に室戸港と書いてあるのを根拠として、享和のころ津呂とはいわず室戸と呼んでいた、津呂と呼ぶのはずっと後世のことだと判断していると解される。この中で現在の津呂を享和のころ津呂と言っていないかたというのは明白な誤りである。これは後で町村名の変遷の所で項目を設けて扱うので、詳しくはその時に譲るが、前出慶長五年（一六〇〇）山内修理の津呂五郎右衛門宛の口上書や、一六五〇年代の藩士の日記、前出の谷真潮の「磯回の藻屑」（一六七八）に、はつきり室津と津呂を今と同じく呼んでいる。いずれも寺石氏の言う享和元年（一八一〇）より早い。

ただ津呂港を室戸港と享和元年の碑に記している点については、少しく考えてみる必要がある。二つの場合が考えられる。一つは兼山が「室戸港記」を作成しているの、それにならって、あるいは敬愛の念を寄せて、同じく室戸港と書いたのかもしれない。今一つは、津呂港であることには変りはないが、室戸港とも呼んでいたかもしれない。室戸の呼称については後に論ずる。

ところが、この著書を刊行した場合は、格別の論議もまき起こさ

なかったが、前述の昭和二年九月の「土佐史談二〇号」の「室戸岬」の一文は、こうこうたる反論を呼び起こすのである。その内容は、前に引用した「土佐名勝誌」の文を、である体に直したただで、全く同じである。

この「室戸岬」という文が、「土佐史談」に、なぜ載ったかという、この年の七月に大阪毎日新聞が読者の投票で日本八景を選んだのに、室戸岬が第四位で入選したのが、動機となったものらしい。

今までは海の難所で知られた室戸岬が、この時から景勝地として売り出すことになる。そういう機運の所へ寺石氏の文章がきっかけとなったであろう。津呂港畔に「紀貫之朝臣泊舟之處」という碑を室戸岬青年団が建てることになる。昭和三年四月のことである。

これに対して、室津泊地は現在の室津であると主張する反駁が、大分年月がたつてからであるが、昭和七・八年ごろ次々と起こってくる。

1 関田駒吉 土佐史談三九号（昭7・6）「土佐漂着船に関する文献」

2 吉岡高吉 土佐史談四三号（昭8・6）「紀貫之朝臣舟泊の地室津に就いて」

3 今村明恒：東大教授理博、室津の今村地蔵観測所に調査に来られ、昭和8年寺石正路氏と対談、津呂説の誤りであることを説い



た。

- 4 久保田博 室戸町誌第六節室津の泊に船繋りする人(昭37・12)
- 5 久保田博 土佐史談一〇八号(昭39・10)「土佐日記に於ける室津の泊について」

- 6 久保田博 土佐史談一一八号(昭42・11)続「土佐日記に於ける室津の泊について」

- 7 山本武雄「土佐日記むろつの泊りについて」(昭43孔版・昭47・)

### 3 室戸市教育委員会発行「室戸のくらし」に掲載)

これらの主張を一々詳しく、ここに紹介するのは不可能であるし、尙ほ尙ほの泊地も今の室津である。ただし室津(旧室津村)の中の何処かについては、種々問題があるのでここには触れなくておく。

津呂はあくまで兼山時代の前後を通じ今日まで、津呂であって、近世の人々も、ちゃんと室津と津呂を区別して認識し、そう呼んでいる。近世の土佐には、捕鯨を業とするものに津呂組という組があり、浮津・室津等の名とともにしきりに現れる(日本常民生活資料叢書22・23巻所収土佐漁業史・土佐室戸浮津組捕鯨史料参照)。ただ室戸という呼称が時々混入してきて、室津・津呂・室戸の混淆となる。そのことについては後で論ずる。右の中の今村明恒氏の説は、5の久保田氏の文に紹介されているが、専門の地経学から、地

盤が一千年前は低く、津呂は山際近くまで波が打寄せ、船泊りとしては不適當であったというのが主眼であった。

### 四 室戸の呼称と室津との關係

これまで見てきたように、室戸という名称が、兼山の「室戸港記」に現れて混乱が生じることになる。では室戸という地名の呼称は、いつから現れ、また室津との關係はどうなるのであろうか。前にも述べたように、「室津」は「和名抄」(九三五)、「延喜式神名帳」(九二七)「土佐日記」(九三五)に現れる。

では「室戸」はどうかというに、僧空海の「三教指帰」(延暦十六年…七九七)に「勤念土州室戸崎」(土州室戸崎に勤念す)とある。そして、「続日本後記」(貞観一年…八六九)承和二年紀(八三五)に「勤念土佐国室戸之崎」とあり、「元享釈書」(元享二年…一三三二)に「往土州室戸崎隨修」と見え、いずれも「室戸崎」とある。また「今昔物語卷十七の第六・地藏菩薩値火難自出堂語」には「今ハ昔土佐ノ因ニ室戸津ト云フ所有リ」とあって、「室戸津」と出ている。今昔の成立は一〇七七年といわれるが、この話の典拠となったという実叙撰の「地藏菩薩靈驗記」は一〇三三年から間もなくのころ、まとめたものと考えられている(遠藤元男・国史文獻

解説。

右の用例は、すべて室戸と戸の字を使っている。「日本地理志料卷五十八土佐安芸郡の部の、室津（室津郡）を見るに、右の諸例を挙げ（続日本後記を除く）、戸津（戸津郡）と説明している。つ（津）、は訓トであつて、船舶の碇泊する処、渡船場であり、と（戸：門も）は訓トであり、水の流れの出入する処（瀬戸）である。（大日本国語辞典）。

さて室津と室戸の問題であるが、吉田東伍の大日本地名辞書は、土佐室戸崎の項で、室戸古室津に作る」と記し、逆に「南路志」は室津村の項で、和名鈔曰として室津をあげ致和云古へハ室戸といひしこと三教指帰続日本紀等に見へたり室津ハ延喜神名帳に室津神社と見へたるか始なり（注：致和は南路志の著者武藤致和）と説明している。

戸と津は音が相通する例は多いようで、私の思いつくのものにも、愛知県宝飯郡に御津と書いてミトとよむ所がある。茨城県の水戸も、もちろん同義語であろう。御津はミツとよむ例は、兵庫縣揖保郡御津町（ここには後に触れる室津という有名な港がある）を始め多くあるようである。ところで、土佐の室津のように室戸とも両様に書く例は少ないのではなからうか。そして土佐の場合は、そのために、いろいろな問題が起こるのである。

まず津と戸の先後の問題であるが、右の室津（むろつ）…和名抄他計三例、室戸…三教指帰他計四例について考えてみたい。なお後者の、続日本後紀・元享釈書は文章が、ほとんど三教指帰と同じで三教指帰に拠つたものと思われる。また室戸の例は、時代が下ると、物語、和歌等にしばしば見られるようになる。狹衣物語一ノ下には、土佐の室戸（室戸）といふ所」とあり（岩波大系本による）…成立一〇五〇頃。また成立年代は少し下るが（二二三〇頃）新勅撰和歌集卷第十釈教歌の部に土佐國室戸といふ所に弘法大師、五七四、法性の室戸といへどわがすめば有為の浪風よせぬ日ぞなき（国歌大観による）とある。また梁塵秘抄卷第二、三一六の歌に、土佐（土佐）の室生門（室生門）とある（岩波大系本による）。これは、前記の狭衣物語と同じようにムロフトとあるが、この点について今は触れず、ト（戸・門）を問題とする。

右の津三例、戸（門）六例を見て、あることを私は思いつく。それは、ト（戸・門）の例は、筆者は空海を始め、土佐の國の人でなく、中央の人の書いたものだと行ってよいのではないか。そしてほとんど学問的文学的文献であると言える。それに対して、ツ（津）の方は、もちろん文献は中央で出来たものであるが、和名抄にしても、神名帳にしても、おそらく現地（土佐あるいは室津地方）から中央へ申告したもの、あるいは現地調査したものを基にしたのでは

ないか。土佐日記の場合は、土佐できいた発音であろう。ツ音は現地の発音であったと私には思えてならない。しかし、それならば、空海の三教指帰は和名抄など津採用書（九三〇年頃より）も、成立はるかに早い七九七年であるのを、どう説明すればよいか。種々の問題が関連してきて、今私は何とも言えない、大方のご教示を賜りたい。

ここで私は、本筋からはなれるが、土佐人のツという発音の問題に触れてみたい。ご承知のように土佐ではジチズツの四つ仮名を區別して発音するという特色がある。戦後、仮名遣いが共通語の発音に従って、原則として、すべてジズになってしまったので、土佐の子どもたちは、父祖から承け継いで来た特技を失ってしまった。ラジオ・テレビの普及と、中央・奥外との人間の移動・往来が盛んになったことと相まって、今ではこの区別のできる人は大まかに言って四十歳から五十歳以上に限られてきているようである。幸いにして私はその一人である。

これは土佐日記に関係があるので、私の一つの思い出を書かしてもらおう。私の師、故池田亀鑑博士が、「古典の批判的処置に関する研究」を著述された時のことであるから、昭和十五、六年ごろのことである。ある日地方の中学教師をしていた私の所へ先生から手紙が来た。それは土佐日記の一月二十九日の条に、ここはどこかと問

うと土佐の泊りと言ったという所で、「ここやいつこ」のほかに、「ここやいどこ」と出ている本があるが、土佐では、づ、というところを、ど、と言うことがあるか、という質問であった。

そのとき私がすぐ思いついたのは高知市にある小津という地名であった。それは高知城のすぐ北側で、当時は私の母校である旧制の高知高等学校があった（今は高知大学教育学部付属小中学校がある）所で今も町名を小津（私には、どうしても、オズとは書けない）という。高知高校が水田を埋め立てて出来たのは大正十二年であるが、そのころはオドと言った。この小津は土佐日記の大津に対する小さい津という意味で、その北東一（一）ぐらゐの泰泉寺という所には中津があったと言われている。そして近世の初め承応二年（一六五三）大阪の陶工久野正伯（よしの せいやく）が二代藩主忠義に招かれて土佐にわたり、高知城北のこの地で製陶を始める。その陶器を地名をとって尾土焼と称したと考えられる。尾土焼を作った場所は高知城の北側、スベリ山の北方、高坂橋の辺といわれているので、江の口川をへだてて北側は小津町である。尾土（おし）は小津のことであると言つてよいと考えられる。このことから、ツというところをドというふうに発音することを示していると言えよう。

また、私の幼時の思い出として、ボール遊びなどしていて、のどが渇くと、すぐそばの家に行って水を飲ましてもらうのであるが、

そのとき、私どもはこう言つたことを今でもはっきり覚えてゐる。

「オバサン、ミドノマイトゼ」と。水を飲ましておせ——水を飲まして下さい——の意である。「水ヲ」が縮まってミドとなるのである。このことからツをミと発音し、それはロに近く聞えるのだと思う。これらのことを先生に返事した。そのことは、右の著書に、土佐では今でもツをドというふうに発音する」と書かれてゐる。

さてこれからが、ツ音とト音についての私の思ひつきである。私などはツをドに近く発音するようにツをトに近く発音する傾向がある。ツをミよりもロのように発音し、ロに近く聞えるように発音するようである。従つてムロツの場合もムロトに近い発音をしたのではないか。その頃の音韻の状況に暗いので何とも言えぬが、もし他国の人がきけば、ムロトと聞えるということはあるのではないか。他国の、中央の人が皆室戸と書いたこととあるいは関係があるのではないだろうか。

前に挙げた室津・室戸諸例の中で、一番古い年代は、空海の室戸であるが、彼は三教指帰を書く前に土佐の国の室戸地方に行つてゐたことは疑いない。とすれば彼は室津という地名を耳にして、ムロトと聞き室戸と書いたのではないか。そう考えれば、この問題は極めてスムーズに理解できるのでないか。私はそういう一つの仮説を

立てることとする。

## 五 室津と津呂の語意

次に室津と津呂の語意について考えてみたい。室津は、室のよくな津の意であるが、室とは、大日本国語辞典によれば、(一)上古、家の奥に設け土もて塗り込めたる処。(二)上古山腹などを掘りて構えたる窟とある。海岸線が湾曲し、後に山を控え、風波を防いで静かな湾を抱いた港を言うようで、土佐の室津のほかに、前出播磨國揖保郡御津町の室津は瀬戸内海に面し、近世に栄えた港として有名である。万葉集卷十二—三一六四の歌に「室の浦」として歌われてゐるが、東を藻振鼻の付け根の西方賀茂明神のある鼻から、西を赤松鼻までの奥深い湾入部分をとつても、幅二、奥行二はある天然の良港である。他には山口県の熊毛郡上の関町にあり、やはり瀬戸内海に臨み、室津半島の先端南西側に、対岸の長島の上の関と向かい合つて、岬と島とに囲まれ、海岸には山が迫つた良い港である。(以上大養孝著「万葉の旅」(下)による)なお吉田東伍・大日本地名辞書によれば、和名抄に出ている豊浦郡室津郷：訓、無呂都(豊西村)……が同じ山口県の日本海側の北西の角の所にある。

さて、土佐の室津にかえることとするが、室津は、室津川の河口

にあり、東は城床山、西は愛宕山の間に約六百mの幅を持ち、その間に津寺山という小山がある。それは室津という名にふさわしい地形である。兼山が室津川の川筋を今のように西に移す前は、今の内港の東側の水尻部落の所に河口があったと考えられる。したがって周囲に山を背負う河口港で、港としての条件を備えていたと言える。

私は最近、高知県立図書館所蔵の「室戸港改修に関する調査書」という、発刊年月日も発行者も執筆者もかいてないB5判八十五頁の小冊子を見ることができた。発刊は大正十一年四月以降まもなくと推定される。県の作成したものであることは確かであろう。その港の歴史と今後の展望を明快に説述したもので、なかなかの美文である。「室津地名の由来」の一節は、室津をよく語っているのので、左に紹介する。

本書室戸港とせるは町名を冠して称呼せるものにして、現在本港は所在地名室津を呼び、室津港と称せり。室津とは「室戸の津」と云ふ意味にして地勢上恰も所の名に背かざる観あり。即ち室津は浮津川（注：室津川ヲ指ス）の河口に位し、西に田野を控へ、前面海洋は室戸・行当の兩岬に抱かれ、風波自ら平穏なる上へ、巖崑遠く海中へ突出し、河口は自ら船を容るるに利便なりしを以て、人家自然に稠密し、漁業・商業等早く開け、室戸付近の津た

りしは疑ひを容れず。或は今の津呂港を以て往時の室津なりとなすものあるも、地勢は到底當らざるなり。

さて次に津呂であるが、兼山が開き、竣工後、記した「室戸港（湊）記」には次のようにある。

此ノ浜北山東南ニ連リテ、正午ヲ過ク、西水涯ヨリシテ南ニ去ルコト九十歩許リ、崇岩分列シテ波水亦稍穏静也。岩間石ヲ疊ミテ以テ之ヲ填補セバ、以テ西風ヲ嚮グベシ。幸ニ釣舟出入之澳有り。尤モ湊ト為スベクノ処也。（原文は漢文）…高知県文教協会、野中兼山関係文書・昭40）

澳(アウ)は「水の曲り入りたる岸べ。隈。厓の弯入せる処」と辞書にある。兩岸が迫ってはいり込んだ地形を感じさせる。前記室津の「小舟の入る池」と、津呂の「釣舟出入之澳」と比べると、室津の方が大きいと判断される。

「津呂」とはどういう意味か、なかなか分りにくい。「津」は前に室津の所で述べたように、船舶の碇泊する処と考えてよからう。「呂」がよく分からない。大漢和辞典を見ても「背骨の骨のつながるさま」とか、「陰の音律」とが出ていて、此の場合には参考になりそうもない。「風呂」の「呂」を連想するが、風呂はムロ(釜)の転という説が有力なようである。とすれば、風呂は当て字になるので、この場合の参考にはならない。風呂が風呂だとおもしろいが、

「呂」は当て字となつて、呂の意味の追究には役に立たないのである。試行錯誤をくり返し、ついに行きあぐねて、私は、それ自身はあまり意味を持たない接尾語の類ではないかと思うようになり、古語辞典の類を探ると、例の万葉集の東歌・防人歌に多い「子呂ころかも」などという接尾語に行き当たつた。上代東国方言としてゐる辞書もある。名詞の下について、語調を整え、親愛感を示す——という点でどの本も一致する。上接語としては、いは・巖いわ・大野・峯たかね・横山辺・家などと、岩とか山とか野とかの、土地の状態を示す語が多いのに心をひかれる。土佐は東国でないのがなんとも残念である。

なお私は本誌前号の小考で奈半利から室戸岬を回つて高岡港沖まで小型漁船に乗つて貫之の足跡を辿つた時の航海記を記したが、その航海のとき室津から西方四よの行当岬なまよの岩礁の中を細長く自然に入り込んだ小さい船なら何隻かはいれる自然港にはいったことがあつた。そこを室戸漁協の松本虎竹氏がフカツロ（深津呂）と言つたことに興味をひかれ、こういう所をツロというな、と心にとめたことがあつた。近代になつて修築した行当港の西方にある。

そして清水孝之氏が、愛知県立芸術大学紀要2（昭47・3・31）・「近世航海資料より見た土佐日記の海事」という論文で、次のように述べておられることを知つた。

「馬踏日記（土佐藩士 馬踏親音うまふみおやねの日記）」（天明二年く一廿八二

V六月五日）の八丈島漂流一件の記事に「新島・式根ト申候之津呂ニ風定迄致船繫候」と、普通名詞としても使われているから土佐では呂の字形に囲われた自然ないし人工の港めくところを指すものようだ。

新島・式根は伊豆諸島にある島である。わずかの津呂に風が定まるまで船をつないだという、わずかの津呂がおもしろい。普通名詞として使われているというのも興味深い。

私は室津・津呂両港をよく理解するために、高知県の海岸線を地図で度々見ているうちに、高知県西部の足摺半島の東岸、足摺岬の灯台から約五き北方に「津呂」（土佐清水市）という地名を発見、それが小さい漁港であることを知つた。前号で私は、室津は港湾法に基づく「避難港」（運輸省所管・避難港というのは「重要港湾」と「地方港湾」の中間にあるかなり重要な港）、津呂（今は室戸岬港という）は漁港法による「第三種漁港」（農林省・水産庁所管。第三種は漁港では最上級。）と格付けされていると述べたが、この土佐清水市の「津呂」は、市町村支弁の第一種漁港という港としては最下級の格付けである。高知県漁港課の図面によれば、幅九〇m、奥行五〇mぐらいの小さな漁港である。地形は、深くえぐり込んだように彎曲して背面は山が迫っている。

さきに二の、室津と津呂の歴史の中で、津呂の歴史を戦国時代

以前に通ることができないといふことを述べたとき、地検帳その他にいくつか「津呂」という地名は見えるが、それは現在の津呂とはちがう位置であると言った。私は國土地理院の五万分の一や二万五千分の一の地図を時々眺めているうちに、佐喜浜町で佐喜浜川口から七百mほど南方で、室戸岬より約十七\*北方の東海岸に「都呂」という地名を発見、ツロとよぶことを知った。土地の人にきくと山が海に迫った所で現在は港という港はない。昔は小さい船をつける所はあったという。土地の人にいろいろきいているうちに、同じ佐喜浜町の、都呂から二\*ほど南方の海岸に尾崎という所があり、そこに小さな区画の地名で上津呂・下津呂・津呂の尾というのがあるのをきいた。特に特徴はないが、海浜の小集落だといふ。いずれも山が迫った地形が共通しているようである。そう言えば室戸市の津呂も山が海に迫っている。

前号で述べたように、海面が一千年前は二〜三m高かったとすれば、津呂の海岸山脈の根元は波に洗われて、今よりも、もっと山が海に迫っていたであろう。前の行当岬の「深津呂」の「深」は入江の奥行の意味にも、水深の意味にもとれるが、どちらにしても兩岸から迫っているという感じは同じである。津呂というのは、海岸の小さな船着場で山や陸地が迫っていて、狭い感じのする地勢の所と「言えないだろうか。呂(ロ)は、小さいものへの親愛の気持ちを表

す接尾語だといふ假説を私は立てることにしよう。なお、松岡静雄著・新編日本古語辞典には、ムロ 密 ムロヤ(室) 韓国語とウム(地室)と同義語か。若し然らば、ロは接尾語とあるから、私はこの假説に執着を覚える。ただし室戸市の津呂は兼山の開さくで港も大きくなり、さらに明治以後は近代的な修築工事をして、大きな外港も出来て、日本でも代表的な遠洋漁業の基地となつて、今では面目を一新している。

## 六 室戸の崎と「室戸」といふ呼称の広域化

さきに空海の三教指帰の中の「室戸の崎」の室戸は室津の転ではないかといふ假説を立てたが、その室戸の呼称が、その後どのように使用されるかを見てみたい。まず「室戸の崎」といふ呼称であるが、土佐日記では、単に「みさき(御崎)」と言っている。現在でも室戸周辺では、単に「みさき」ということである。それは、その社会圏内にいる人は、その名称を「々言ふ」必要がないからである。少なくとも高知城下周辺から室戸崎へかけての人々は、近世の人も普通は御崎と言いつ時に御鼻(あるいは鼻とも)といったようである。藩主でも書状などには御崎とかいっているのが見える。ただし幕府へ出す室津や津呂の港のサラエ普請の許可申請状などには、土佐國

安喜郡室戸嶋ト申所ニ……(四代豊昌の時)と、対外的な改まった書き方をしている。オハナというのは、どうも近世の俗称らしい。私などはオハナである。

室戸嶋というのは、あくまで対外的な用語として使ったようである。あるいは改まった言い方、特に明示する場合など、特殊な場合に用いると言つてよいようである。それは、ちょうど、あの有名な、ヨサコイ節の、土佐の高知の播磨屋橋で坊さんかんざし買うを見た」という歌詞は、最初出来た時は、「おかしなことよな播磨屋橋で坊さんかんざし買ひよつた」であつたと言う。末尾の方は別として、初めの方は、この歌がだんだん土佐の国の外で歌われるようになったので、どこの播磨屋橋か明示するため、「土佐の高知の」を付けたのであると言う。

安養寺禾磨の「土佐幽考」(享保一九…一七三四)に、岬(室戸嶋を指す)という項で、「土人称<sub>ニ</sub>御島<sub>ニ</sub>」と記している。

なお前出の今昔物語卷十七の第六話の「地蔵菩薩靈驗記」の「土佐ノ國ニ室戸津ト云フ所有リ」の室戸の津は、空海の室戸の嶋と似た言い方である。これはもと室戸は室津で港の意であるのが、港とは離れて地名として意識されている。だから港という意味の「津」をわざわざ付けるのである。たとえば私の身近かな例で恐縮だが、私の住んでいる所と高知市との間に、有名な五台山がある。中国の

五台山に似ているので行基が命名したといわれている。ところが、後に村の名となり地名となった。だからその山のことを、私の部落の人は、五台山山<sub>ゴサイザン</sub>という。ちょうど、そういうケースだと考えられる。

ところが室津が港とその周辺を言うのに対して、室戸という地名は、もっと広い範囲に使われるようになっていく形跡で出てくる。

前出「土佐幽考」には次のようにある。

室津<sub>ニ</sub>羽根村東、或称<sub>ニ</sub>室戸<sub>ニ</sub>。

近世中期の記述であるが、室戸という呼称が普及してきたことを示している。

また一方では、故事類苑・地部41津の所に、「土佐名所記」という書物からの引用として次のように記してある。

室戸、東寺也又云東寺より西寺の間都て室戸嶋と号す、私云室津右の「土佐名所記」がどういふ本か分からないが、「皆山集」(高知県立図書館版)8所収の「土佐名勝記」と同じ物らしい。後者には次の如くある。

室戸岬 東寺の岬也又云東寺より西寺の間すべて室戸嶋と云とぞ前記「皆山集」8所収の「東遊稿」(天保五年…一八三四成立)にも、東西両寺の間は都て室戸と申候……。

なお室戸三寺について説明しておく。空海はこの地に、西寺(金



剛頂寺：由元村にある、行当碑の北方・四十寺（平安末期、御台地上に移り、東寺、一名最御崎寺という）・津寺（津照寺：室津川口、津寺山にある）の三寺を開いた。

さて、右の「土佐名所記」「土佐名勝記」の記述は、少し分かりにくい、要は室戸崎突端台地にある東寺から行当崎北方台地上の西寺の間を室戸崎とも室戸とも言うという意味であろう。

なお室戸碑は、もとは室戸崎とかき、呼び名は、御崎（三崎・深崎とも）東寺の崎・最御崎ともいい、津呂の崎ともいったらしい。なお西方の行当崎は行堂崎ともかき、西寺の碑、西寺鼻とも言う。

ここで野中兼山が、寛文元年（一六六一）津呂港竣工後草した「土佐国室戸港記」を、何故「津呂港記」としなかつたかを考えてみたい。前に述べたように、東寺西寺の間あたりの広い地域を室戸と呼ぶようになっていたであろうことは十分可能性がある。そして室戸の御崎回りの海難を救済する悲願が、この開き、工事には秘められていた。かれはこの大事業を強行して莫大な労役と黄金を代償として支払い、民衆の怨みを負い、同僚の嫉視排擠にあり、翌々年失脚するのである。この世紀の大事業に津呂という歴史の浅い集落名は貧弱すぎる。しかも今一つの室津港は、彼の死後一木権兵衛が、津呂の何倍もの黄金何十倍もの夫役を費して十六年後に漸く出来上るのであって、この時新港は栄光に輝いていたのだ。弘法大師以

来の雄大な背景をもつ、室戸という名称こそはふさわしいと彼は考えたのではなからうか。まことに雄渾壮大の大文章は鬼神を泣かしめ、懦夫を起たしめる概がある。敢て後世の誤解を招きながら、「土佐国室戸港記」と題した心情は察するに余りがあるではないか。

## 七 資 料

### 行政区画としての室津・津呂・室戸

享和三年（一八〇三）と天保五年（一八三四）の土佐国郡村帖（郷帳）は、同じ内容であるが、碑以西は東寺、椎名・津呂・領家・室津・津寺・元の村名が見える。

明治二年のには、佐喜浜・津呂・東寺・椎名・領家・室津・浮津・元が出ている。

明治四年には区制がしかれていて、

四区 津呂浦 三津浦 椎名浦 高岡村 総四村三浦

五区 室津浦 浮津浦 総二浦

六区 室津村 浮津村 領家村 総三村

明治八年 第一大区に属する

第二小区 佐喜浜浦 津呂村

第三小区 室津浦 浮津浦 元浦 黒耳浦 領家浦

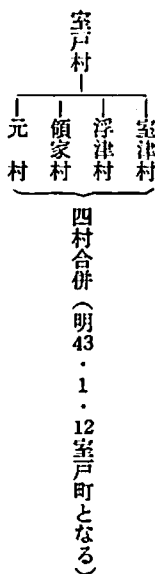
(第四小区 吉良川……以下略)

明治三二年

佐喜浜村(昭18・11・3 佐喜浜町となる)

津呂村(昭3・1・1 津呂町・昭4・10・1 室戸岬町となる)

野根村(昭12・2・11 野根町となる)



昭和34・3・1 室戸町・室戸岬町・佐喜浜町・羽根村、合併して室戸市となる。

明治三二年 甲浦村・白浜村・生見村・河内村、合併甲浦町となる

佐喜浜村(昭18・11・3 佐喜浜町となる)

右の変遷一覧表により、津呂と室津は享和・天保以来、別々に存在し、津呂村は津呂町となり、ついで昭4室戸岬町となりこれによって津呂港が室戸岬港となったこと、また明治三二年に室津村が浮津・傾家・元の三村と合併し、室戸村となり、行政区画上初めて室戸という呼称が生まれたこと、に注目せねばならない。

右の町村変遷一覧表は、高知県史編纂委員会事務局の吉田万作氏の苦心の製作に成るものを借覽させて頂いたことを感謝する。

なおこの稿をなすに当り、高知県港灣課、同漁港課、同文書学事課、室戸市教育委員会石建賢八郎、室戸市在住松野仁、同山本武雄の各位に、調査ならびに資料について、ご教示とご高配を賜ったことを深謝する。(一九七五年二月)

### 追記 四「室戸の呼称と室津との関係」の項について

ツの音について、土佐人は $\text{ts}$ よりも $\text{t}$ のように発音するようである。と述べたが、あとで金田一京助著「増補國語音韻論(昭和10・5)に「高知その他で現につを今尚 $\text{t}$ に発音している」とあるのを見出した。

また大修館「講座國語史2・音韻史」を見ると、ツを古代には $\text{t}$ と発音し、それは一二〇〇年頃から $\text{ts}$ に変わる。としている。したがって空海の「三教指帰」(七九七)のころは、全国的に $\text{t}$ であったと考えられ、土佐人の $\text{t}$ という発音は特殊ではなかったことになろう。しかしツ音とト音が近似していたとすれば、ツがトになることはあり得るから、私の仮説は、そのまましておく。